

日本
短歌
文庫

NIHON TANKA BUNKO

滅び行く森
大森

日本短歌文庫20集

日本短歌文庫 第20集

〈滅び行く森〉

一九九〇年十一月一日 発行

定価 一八〇〇円

(本体一七四八円)

著 者

大 森 孟

発行者

福 澤 英 敏

印 刷

日本図書刊行会
印刷部

発行所

〒112 東京都文京区音羽
一・二五・一・三二三

(株)近代文藝社

電 話 03 九四二一〇八六九

振替口座 東京七・六八八七五

日本短歌文庫

大森

孟集

―滅び行く森

歌集
「滅び行く森」
目次

住居一つ	6
武蔵の国悲田処跡	9
安行植物取引センター	13
八国山雑詠(一)	15
あかつきの探鳥	19
八国山雑詠(二)	22
赤城山	26
八国山雑詠(三)	28
長野県松代にて	32
八国山雑詠(四)	35
命終る不安	39
補助線一本	40
御岳溪谷	42
川中島古戦蹟	45

食菌また毒菌	47
母の命	50
滅びゆく森（一）	52
暁の彗星	56
滅びゆく森（二）	58
茶の花のころ	63
滅びゆく森（三）	65
閑日	69
ふるさとの日々	73
草木への挽歌	76

年譜

あとがき

住居一つ

買ひ換へむ住みかへむと立つ分譲地価格五千
万円に心をのく

分譲地見む建築見むと登る道朴の葉透きて湖
水ひかりつ

病害に立ち枯れてゆく煙草畑取り残したるこ
んにやくの萌ゆ

清々と樹間をうねる自動車道分譲地を出で直
ちに登る

たかが住居一つと言へどその価格に吾が半生の稼ぎは及ばず

この家を売らむと思へど建てし日の価額にとほし査定の結果は

度はづれて太き梁使ふこの我が家鉄鋼不足に苦しみ造りき

H鋼の構造物造るを夢としてただ一つ建てきこの三階の家

蝦夷すみれ叡山すみれの咲き始む桜落葉の重なる間に

低温に幾日か過ぎ浜茄子も藤もにはかに衰へ
始む

戸を漏るる灯の光束に厩舎見ゆ露置く馬柵は
鈍くひかれる

広き庭を喜びながら駅に遠きを厭ふ子のため
転居をためらふ

心を決め処理場に持ち込む古道具払ひ込む処
理費一キロ二円

ブルーベリーの青黒き実によみがへる娘とク
ロウスゴの実を摘みし日々

武蔵の国悲田処跡

ここに倒れ救はれしや否やは定かならず悲田
処跡に余光のむらさき

谷へだつ斜面にチェンソーはうなりたて伐採
は残る林に及ぶ

火防線の伐採跡はまた茂り日に色さゆるヤク
シソウの花

幾人の采女が防人が越え行きしか吾が住む谷
をその前山を

目下に家はひしめき迫りたりいづれの道か府
中へ通ふ

ここに倒れここに救はれしはいくばくぞ悲田
処の跡葛のはびこる

藪となり残る武蔵国悲田処あと沿ひゆくは古
道僅かに二百メートル

この谷を越えしか府中へ通ふ道悲田処の跡を
目下にして

国府より京へ送る隊列も防人も悲田処に沿ひ
てゆきしか

悲田処の跡に沿ひのこる二百メートルこの道を防人も采女も行きし

地藏立つこの辻に吾は足とどむ忘れかねたる一つ思ひに

さむざむと枯れ立つ林に歩み入る碑一つたづねあぐねて

街灯の光り届かず冬枯れの野に礫敷くのみ武蔵国悲田処跡

吾が心しづまりゆかむひとときかアキギリの花咲く山道に

国庁はいまだ遠きにこの谷に倒れし者のあり
無し知らず

谷越ゆる古き道には落葉積み思ひしきりなり
部の民のこと

年号に月日に疑ひいだき見つ碑にはきざむ分
倍村岡の戦さを

府中に倒れしは飽間一門といふきほひ長駆の
新田勢勝ちしや

雨降らず日々過ぎ行きて古塚の墳丘の土もろ
く崩るる

安行植物取引センター

明日のせりを心頼める生産者らし市に来て槓
の整枝してゐる

満天星も皐月も数まとめ競りに掛くかかる慣
ひを吾が知らざりき

機械にかけ研磨せる三波石角まろし自然の石
に異なる色つや

植木祭りと人混みあへりまれまれに買ひたる
草木持ちたるにあふ

追ひすがり声に呼ぶ主に胸をなづ三年ぶり安
行の移り激しく

黄楊の園木こくの園など見てまはりクレーン
車に買ひたる白雲木積む

スコップを取りに戻れるここの主土間に来て
再び話し始めつ

客われらに話しかけ息整ふらしこともなく主
は柿を掘りとり

苗木掘り根巻きしゆくを見つつ暮れ百日紅の
苗買ふを忘れつ

八国山雜詠（一）

雪の重みに折れたる松を惜しみつつ芋洗う棒
を二つ作りぬ

間近くに寄り来て人を怖るるなし朝雪積む谷
にコゲラは

人影を怖れずヒワは餌をあさる僅かに土の見
ゆる造成地

塚の前に憩ふをならひと登り来て心かたむく
ヒワヒタキの声に